

移住者と向き合う／「憧れ」との差、埋める努力を

谷口吉光（秋田県立大学）

最近、「移住者」や「地域おこし協力隊」の話題が多い。秋田県が人口減少対策の一環として移住者の受け入れに本腰を入れ始めたせいもあるだろうし、実際、めざましい活動をしている移住者も多い。

本欄 2016年5月29日付で「田園回帰の潮流」と題した文章を書いたが、都市からの移住者が増えているのは秋田だけではなく全国的な動きであり、その底流には「農村」に対する価値観の大きな変化がある。一言で言えば、「都会はカッコよく、田舎はダサイ」というこれまでの価値観が変わって、都市住民の目に田舎が魅力的に見えるようになったのだ。

今年1月に総務省が行った「田園回帰都市住民アンケート調査」の結果を見た時は驚いた。全国の都市住民の31%が「農山漁村に移住してみたい」と回答しており、その割合は若い世代で高く20代37.9%、30代36.3%だというのだ。都会人の3人に1人以上が「田舎に住んでみたい」と考えている？よく考えればとんでもない数字だ。

田舎に住みたい理由がまたおもしろい。第1位が「自然環境に恵まれたところで暮らしたい」（46.7%）、次いで「環境にやさしい暮らしや自給自足の生活を送りたい」（28.3%）、「都会を離れて静かなところで暮らしたい」（26.6%）、「ふるさと（出身地）で暮らしたい」（22.8%）と続く。

「豊かな自然」「自給自足」「静か」などは秋田ではみな当たり前だ。地方人には当たり前のことが都会人には憧れの的になっている。秋田に住む私たちはここにもっと注目すべきだと思う。

ところがここに落とし穴がある。「田舎が好きな人なら秋田に来て地元とうまくやれるだろう」と思うかもしれないが、残念ながらそう簡単には行かない。

現実には、移住者と地元の間には大きな考え方の違いがある。今年になって移住者と地元の交流会に参加する機会が増えたが、移住者が田舎への熱い思いを語っても、地元民は何のことかわからず呆然としている光景に何度か出会った。

「この村はすばらしい。生きていくのに必要なものが何でもそろっている」と若い移住者が言う。彼の目には小さな畑で育つ野菜、川で釣れるイワナやヤマメ、山で採れる山菜やキノコが輝く自給的暮らしの宝石のように見えるのだが、「この村には何もないから若い者はみんな出て行った」と思っている地元のおじいさんやおばあさんには彼の言葉が理解できない。「こいつは何を言ってるんだ」という無表情で聞いている。

「移住者を増やすにはまず仕事と家が必要だ」という発想はまちがっていないが、それだけでは足りないと思う。移住者の「田舎への憧れ」と向き合い、地元の人々の「現実」とのギャップをていねいに埋める努力がもっと必要ではないか。移住者が定住者になって初めて人口減少の歯止めになるのだから、心と心をつなぐ取り組みがもっと重視されていい。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2017年12月3日掲載分に加筆・修正した）